アルとマシューの魔法修行

Arthur

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルとマシューの魔法修行

【Ｎコード】
Ｎ１２４１ＢＡ

【作者名】
Ａｒｔｈｕｒ

【あらすじ】
双子のマシューとアルフレッド。二人はとある満月の夜、魔法修行に出かけた。
夜汽車にのって着いた港街、そこには兄弟でパン屋を営む魔法使い、アーサーとフランシスがいた――――。
なんだか、想像力の「そ」の字もないありきたりなお話ですが、暇な方は見てやってください。

満月の夜は旅立ちの日。（前書き）

満月の夜に出発したいじゃないか！！今日は記念すべき日なんだぞ☆

発想力のない作者はヘタリアと何かのパロしかできないと思うんです。で、文章力もありません。アマゾン川並みの広さの心を持ってこの小説に挑んでください。

満月の夜は旅立ちの日。

？東北東の風、風力１、晴れやかな満月の夜になるでしょう？
風の音、草がこすれあう音、蜂の飛ぶ音。たくさんの音に囲まれながら、俺はラジオの天気予報を聞いていた。なぜかって？今日は記念すべき独り立ち、あっ違う。二人立ちの日になるかもしれないからさ。旅立ちに良い天気は欠かせないだろう？俺は、自分を鍛えるために修行に出るんだ！

「アルー？ホットケーキ焼けたよー！早く戻って来てくれよー！」
この俺を呼ぶ声の主はマシューって奴。俺の双子の兄貴なんだ。独り立ちじゃなくて二人立ちなのはマシューと一緒に修行に出かけるからさ！あぁ、そういえば肝心な自己紹介を忘れていたね。俺は魔法使いの血を受け継ぐ、「アルフレッド」さ！！

さっきの話に戻るよ。えーっと・・マシューのホットケーキはすっごく美味しいんだ！！おいしいホットケーキを食べる前に天気予報の事を皆に伝えなくちゃ！！
「マシュー！！今日は満月だ！！晴れるってさ！！早く師匠たちに伝えに行こう！！」
俺は、俺の事を迎えに来てくれたマシューの前を走って通り過ぎ、師匠たちのいる家へと向かう。

「王躍（ワンヤオ）！！　菊！！　今日俺たち出発するよ！！」
開いている窓から家の中にいる二人に話しかける。
「はぁ？！ホントに行くつもりだたあるか？！お前たちにはまだ早いある！！それにあれはかなり昔の」

「いいじゃないか！！君たちは俺たちと同じ年の時に修行に行ったんだろ？あ、菊ー！あのラジオもらうぞー！！」
「アルフレッド！！」
―ぼわぁん！！
王躍は薬を作っていたのだが、大声を出したせいで心が乱れたのだろう。薬はものすごい音を立てて爆発してしまった。
「ＨＡＨＡＨＡ☆」
「スミマセン・・。王さん・・。」
階段を急いで上がり自分の部屋にあがっている俺の後ろに続くマシューは、階段を上がりながら王躍に謝っていた。
（とにかく！！俺は絶対、修行に行くんだぞ！！）

満月の夜は旅立ちの日。（後書き）

はい！ここまでありがとうございます。さっさとパロやめて自分でストーリー考えろや！という方もいらっしゃることでしょう。本当に申し訳ありません。
ですが！！このあとがきをあなたが読んでいるという事は、あなたがこの小説を最後まで読んでくれたという事。本当にありがとうございます。
１話を乗りきることができたあなたならきっと大丈夫！最後までよろしくお願いします！！

菊の表情（前書き）

菊さんが今まで僕たちに見せた事のないような怖い顔をした。この日、この瞬間から、僕たちの宿命は動き出す――――。

菊の表情

「ねぇ、アルー。やっぱり、王(ワン)さんたちの言うとおりにした方がいいよ。修行は・・・」
僕は、大きなバッグに自分の荷物を押し込んで出発の準備をしているアルにかける。
「何言ってるんだい？君だってあの時の事、気になるだろう？それに、俺たちは真実を探しださなきゃいけないじゃないか。」
アルは荷物を押し込んでいた手を止めて、僕に少し怒った顔を見せる。
「そう・・・だね・・。」
（アル・・まだあの時の事を・・。もう、いいじゃないか・・・。あんな事件、早く忘れてしまおうよ・・！！もし、あの時僕が見たものが正しかったら・・。）

「あの・・お二人とも。」
後ろから菊さんの声がして、僕の頭の動きは一瞬止まってしまった。だって、考えてた人がいきなり目の前に現れたら、びっくりするでしょ？良いことじゃなかったらなおさらね。
「・・どうか、なさいましたか・・・？」
そんな僕を見て菊さんは心配そうに顔を覗き込んでくる。
「あぁ！！ハイ！大丈夫です・・！！」
そう答えた僕を見て菊さんはにっこりと微笑む。
「なあ、菊！俺たち、今夜修行に行ってもいいよなぁ？」
突然、アルは菊さんの着物の袖をぐいぐい引っ張って菊さんに話しかけ始めた。菊さんは「着くずれしてしまいますよ。」と困った顔をして、アルの腕を離させた。

「・・はぁ。修行に出る、ですか。でも、修行はとても大変ですよ？」
一息ついてから菊さんは少し困った顔をしながらそう言った。
「大変じゃなきゃ修行じゃないじゃないか！何言ってるんだい、菊！」
いつものように笑顔で答えるアル。そんなアルを見て、菊さんは小さく鼻でため息をつきながら眉をひそめ、部屋を出ていってしまった。
ふと菊さんを見た。階段を下りていく菊さんの表情。それはいつもの菊さんからは想像できないような厳しい表情だった―――。

「王さん。やはりお二人は修行に行くつもりのようですよ。」
薬を作りなおしている我の所に少しおどおどした菊がやって来た。
まあ、当然だろう。あの二人が修行に出て、もしあの街に着いてしまったら。もし、本当の事を知ってしまったら。そう考えれば、いつも表情を変えない菊がおどおどしてしまう訳もよく分かる。
「そう・・あるか・・。まあ、あの街は結構遠いある。二人があの街であいつらに会わない事を祈ってるよろし。」
ただ、それしか言う事ができなかった―――。

菊の表情（後書き）

ホントに変な所で切りますね。私は。
こんな変てこな話を2話まで読んで下さっているそこの貴方！本当にありがとうございます。
アドバイスお待ちしております～！

夜汽車での出会い

「じゃあ、行って来るんだぞ！！」
「行ってきますね。」
そう言って二人は夜汽車に乗りこんだ。「行ってらっしゃい。」「気をつけるあるよ～」と言いながら電車の窓から手を振る二人に手を振り返した。
「行って・・・しまいましたね・・・。」
「ああ、まさか汽車で行くとは思ってなかったある・・・。もしかしたらあの街に・・。」
私たちの不安は募っていくばかりでした――――。

「ふぅ・・・。やっと修行の始まりだな！！マシュー！！」
「しーっ！！他のお客さん目が覚めちゃうでしょ！！今、夜なんだから静かにしててよ！」
僕がそう言うとアルは口元を手で押さえて辺りをきょろきょろ見回してから俺に笑って見せた。
（ホントにアルはお茶目なんだから。全く・・）
一度窓の外を見てからアルの事を見た。そしたら、この短時間の間にアルは寝むりに就いていて。そんなアルの寝顔を見ていたら僕も、いつの間にか眠りについていた――――。

「ん。ああ、アーサー、来てくれたんか～！助かったわぁ！ホンマ、あのお客さんぜんっぜん目ぇ覚まさないねん！！」
「ああ・・。にしても、なんでお前の運転する汽車はこうも寝て起きない奴が多いんだ・・？」
アーサーは、俺の運転していた汽車の終点、「ポートマリティーン」のホームで電車に乗った俺と話していた。
「そんなん、俺の運転がすっばらしく気持ちいからに決まっとるやろ～！！まあ、そんなんええから、さっさと魔法であいつら起こしてぇな！！！」
「分かってるよ！！あ、これ俺の為だからな！！ただ、えっと・・・魔法の練習の為だ！！決してお前の為なんかじゃ・・！！」
「わぁってるて。ササッと電車ん中入り。」
ぶつぶつ言いながらアーサーは電車の中に入って来た。てか、お前の魔力なら別に練習しなくてもいいだろ、と言おうとしたけど、喉で押さえた。
（機嫌そこねられたら、困るわ・・・。）

「ふぅ・・。Ｗａｋｅ　ｕｐ.　Ｏｆ　ｓｌｅｅｐ　ｏｖｅｒ　ｔｉｍｅ.」
アーサーが眠っている二人の客に両手をかざし、呪文を唱えた。なにも起こっていないように見えたが確実に呪文は効いていたようで。
「ふぁああ・・。ましゅー・・・、ここどこだい？」
「知らないよ・・・、なんでも僕に聞かないで・・・。」
さっきまで叩いてもトマトを顔に押し付けても起きなかった客二人が目を覚ましたのだ。まだふわふわした感じだったが、二人はアーサーの声で起きることになる。
「てめぇら・・！！さっさと起きろ！！もう、終点なんだよっ！！」
途端に背中をピンと伸ばす二人。これは・・魔法じゃなさそうだ。

「うわぁ！！なんだい？！君は！！ＨＥＲＯのお休み中だったのに！！失礼じゃないか！！」
眼鏡愛用者のようで眼鏡をかけながらアーサーに反論する。そいつの連れと思われるもう一人の客はとてもおどおどしている。
「終点なのに起きねぇ、お前らの方がよっぽど失礼だ・・・。」
「うるさいなぁ。とにかく、もうひと眠りさせてもらうぞ！！」
反省も何もしていないようで少年は毛布をかぶってもう一度寝ようとする。
「てんめえ・・！！いい加減にしろよ・・！！」
「ＨＥＲＯは寝てますよ～だっ！」
―ピチっ！
（え・・？なんか今変な音し）
「こんのガキどもぉぉおおお！！！こうなったら俺の魔法でコイツらのことスコーンの材料にしてやるっ！！」
サッと懐から杖を出したアーサーを俺は咄嗟にアーサーを止めに入る。
「んなっ！！そんなことしたらあかんて、アーサーっ！！！」

（え・・？今、「アーサー」って・・・！！）

―ガシッ！！
「あなた・・魔法使いの、アーサーさんなんですかっ――――？！」

夜汽車での出会い（後書き）

～舞台裏～

アル「なあ、マシュー」

マシュ「なに？」

アル「君、アーサーに抱きつくのに抵抗なかったのかい？」

マシュ「え・・」

アサ「うるっせえ、ばかぁ！！」

二人の魔法使い

「あなた・・・魔法使いの、アーサーさんなんですかっ――――？！」
突然俺に抱きついてきた少年、抱きついたというよりは跳びついたという感じだろうか。さっきまでおどおどしていただけでよく意識していなかったから、いきなり跳びつかれると正直びっくりする。
「あ・・あぁ・・」
まだ言葉を伸ばし切っていなかった所に、少年が言葉を重ねる。
「あの・・！！僕たち魔法使いで、今、修行の身なんです！！どうか、僕たちに魔法を教えてくれませんか？」
まっすぐな瞳で真剣に頼まれると、なかなか断れないもんだ。
「え、ああ。俺は別にいいが・・・。フランシスの許可を取ってからでもいいか？」
少し遠慮勝ちに言うと、少年は満面の笑みで「もちろんです！！」と答えた――――。

（なんか・・勝手に話が進んでいるんだぞ・・・。）
「おい！マシュー！！どうしてそんなヤツに魔法を教わるんだい？この街には、彼以外の魔法使いがいるだろう？」
俺がそう言うとアーサーという青年が悲しそうな顔をしながらこう言った。
「この街にはもう、俺とフランシス位しか大きな魔法を使える奴は残っていない。３年前の西と東の大戦争で、みんな死んじまった・・・。」
そう言うとアーサーはキュッと口元を固く結んだ。
（３年・・前・・・？）

アルは僕の横で目をまん丸に見開いていた。３年前、それは父さんたちが死んだ年だ。

（アル・・やっぱり父さんたちの事を・・・。）

西と東の魔法を使った大戦争、それに巻き込まれてたくさんの魔法使いが亡くなった。もちろん、魔法を使えない一般の人も。

その戦争があった年、僕とアルは、まだ王（ワン）さんたちの所で魔法を習っていなかったんだ。今僕たちのいる、西の港町「ポートマリティーン」と東の山岳街「シャンション」の丁度真ん中あたりの街、「プレ」という街で、僕たち二人は父さんに魔法を習っていた――――。

西の港町と東の山岳都市の戦争が行われた場所は、僕たちの住む「プレ」だった。予告もなしに突然降り注ぐ魔法攻撃に、僕たちの街の人々は対応しきれなかった。僕たちの目の前で、父さんも、母さんも、街の人も、みんな命を落としたんだ――――。

二人の魔法使い（後書き）

ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。
ぐちゃぐちゃしてて分かりずらいし頭の悪い表現ではありますが、
これからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1241ba/

アルとマシューの魔法修行

2012年1月5日00時47分発行